









「それで、呼び出すのですか？」	いた。	には色の着いた何かが入っている籠を持って	て奥の扉を開けてまた戻ってくる、その手	女将はカウンターを軽々と跳び越える。そし	あれだけの距離を歩いてきたにも関わらず、	聞くとするよ。」	ね。その中の“風”を今から呼び出して話を	「この宿には精霊と呼ばれる物たちがいて	情報は手に入らなかった。	空に視線を送ってみたが、やはり何も有益な	頭も身体も酷使できない。番才は横に立つ漠	え満身創痍を体現している状態で、これ以上	気軽に返事ができなくなっていた。ただでさ	見ていくかい？」	「言葉の通りさ。ちょうどいいからあんたも	歯を食いしばり身体を起こす。	意味ですか？」	「風？ちよっと待ってください。どういう	番才の脳の残った部分が反応する。
-----------------	-----	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------	----------------------	---------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------	----------------------	----------------	---------	---------------------	------------------

精霊を呼び出すと聞いてまず思い描いていた  
 幻想的な方法とは思えず、番才はその色の着  
 いた何かを覗き込みながら尋ねる。  
 「ひっひっひっ。なに、呼び出すと言っても  
 そんな大層なこととはせん。簡単なことだよ。  
 この風船に風の精を吹き込むだけだからね。」  
 そう言うと女将は籠の中から一つ、灰色が多  
 くを占める風船を摘み上げた。  
 「風船？」  
 番才は目の前に掲げられたその風船を見つめ  
 た。全体的に灰色がかっているが、所々に白  
 や肌色が着色されている。空気を吹き込む以  
 外に使用方法がないのだろうが、番才はこれ  
 をどう使うのかわからなかった。  
 「うーん、そうだねえ。〃奥占（おうせん）  
 に聞くとしようか。」  
 女将は口に何かを咥え、その先端に持ってい  
 た風船の吹き込み口を取り付けた。そしてそ  
 のまま大きく息を吸い込みと空気を吐き出し  
 風船は瞬く間に膨らんでいった。

「	さ	て	、	話	は	聞	い	て	お	り	ま	し	た	。	な	に	や	ら	
番	才	は	生	ま	れ	て	初	め	て	風	船	に	頭	を	下	げ	た	。	
申	し	ま	す	。	以	後	お	見	知	り	置	き	く	だ	さ	い	ま	せ	。
お	初	お	目	に	か	か	り	ま	す	。	わ	た	く	し	名	を	奥	占	と
「	え	え	。	も	ち	ろ	ん	存	じ	て	お	り	ま	す	。	“	番	才	様
女	将	は	ぽ	か	ん	と	し	て	い	る	番	才	を	指	差	す	。		
い	？	」																	
「	久	し	ぶ	り	だ	ね	奥	占	。	こ	の	子	は	知	っ	て	い	る	か
ふ	さ	が	ら	な	か	っ	た	。											
下	げ	、	言	語	を	発	し	た	こ	と	に	番	才	の	開	い	た	口	が
そ	の	場	で	浮	か	び	続	け	な	が	ら	手	足	を	動	か	し	頭	を
し	て	漠	空	様	お	久	し	ぶ	り	で	ご	ざ	い	ま	す	。	」		
	「	や	あ	や	あ	や	あ	、	こ	れ	は	こ	れ	は	八	雲	様	、	そ
い	る	よ	う	に	何	度	も	瞬	き	を	し	て	い	た	か	ら	だ	っ	た
を	身	に	つ	け	た	そ	の	人	型	の	風	船	の	目	が	、	生	き	て
髪	の	混	じ	っ	た	よ	う	な	灰	色	の	頭	髪	と	白	い	マ	スク	
の	大	き	さ	の	人	型	に	膨	ら	ん	だ	こ	と	。	そ	し	て	、	白
か	り	思	っ	て	い	た	風	船	が	、	自	分	の	上	半	身	く	ら	い
番	才	は	驚	い	て	い	た	。	丸	く	膨	ら	む	の	だ	ろ	う	と	ば
	「	ふ	う	。	ま	あ	こ	ん	な	も	ん	か	ね	。」					

「その騒ぎを聞きつけ、名取様が対処され	思わず驚きが番才の口からこぼれた。	「えっ!？」	われしました。」	び出されまして、そのすぐ後に雫様が気を失	が、しばらくくすると悲鳴を伴って部屋から飛	「それからすぐに望鏡の間へと赴かれました	すぐに雫たちのことだとわかる。	ました。」	に、外から五名の宿泊者様がお戻りになられ	「八雲様方がこの宿を後にされてからすぐ	に振って少しずつ上に浮かび始めた。	奥占と名乗った風船は、手をバタバタと上下	情報になる。」	あんたがなにも見ていないならそれはそれで	ても構わないよ。何かが起きていたらでいい	「そうだね。ただ、そんなにかしこまらなく	のでしたよね?」	をお尋ねされようとわたくしを呼び出された	不穏な空気漂うこの場所で、何が起きたのか
---------------------	-------------------	--------	----------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------	-------	----------------------	---------------------	-------------------	----------------------	---------	----------------------	----------------------	----------------------	----------	----------------------	----------------------

女	「	他	知	「	行	に	う	「	を	奥	向		女	「	流	に	部	に	ま
将	そ	の	っ	え	方	何	奥	な	丸	占	か		将	構	暢	ご	屋	に	し
は	う	物	て	え	は	を	は	る	い	は	つ		が	わ	な	に	に	、	て
そ	か	な	い	。	わ	聞	わ	ほ	手	は	て		先	な	状	質	名	名	。八
う	い	ら	る	。わ	か	い	か	ど	で	、	し		を	い	況	問	取	取	雲
と	と	ま	と	。わ	ら	て	な	。・	示	、	ま		を	か	説	を	様	様	様
漠	す	だ	す	。わ	な	いた	ぜ	。・	した	、	わ		を	ら	明	さ	を	を	方
空	ま	可	れ	。わ	い	のか	零	。あ	。〃	わ		を	を	。〃	が	れ	を	を	が
を	能	性	ば	。わ	い	か	が	い	〃	か		を	を	。〃	途	た	残	お	お
一	高	も	、	。わ	う	。部	取	。わ	〃	。〃		を	を	。〃	切	後	し	戻	戻
瞥	う	巡	“	。わ	こ	屋	乱	。わ	〃	。〃		を	を	。〃	れ	で	て	に	に
し	ご	回	橙	。わ	と	に	し	。わ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	な	な
、	ざ	が	姫	。わ	で	戻	の	。わ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	ら	ら
何	い	ご	（	。わ	い	つ	か	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	れ	れ
か	ま	ざ	と	。わ	い	た	、	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	る	る
を	ま	い	う	。わ	い	た	名	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	少	少
感	よ	ま	き	。わ	い	二	取	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	し	し
じ	。〃	さ	）	。わ	か	人	が	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃	前	前
		す	”	。わ	〃	の	零	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃		
		。〃	や	。わ	〃	〃	が	。あ	〃	。〃		を	を	。〃	。〃	。〃	。〃		

